

科目区分：芸術文化課程（音楽文化コース）

授業科目名：ピアノ④

対象年次：3年次

ピアノ演習による授業実践

音楽教育講座・福富 彩子

1. 目的と到達目標

本授業は、ピアノの演奏技術と表現力を高めるための演奏法を学ぶことを目的としており、ロマン派作品を取り上げて演奏研究を行う。「ピアノ」は、①～⑤まで段階的な履修が可能な専門科目として芸術文化課程音楽文化コースの学生を対象に開講している。「ピアノ④」は、3年次前期に習得する発展科目として位置づけており、3年次後期の「ピアノ⑤」に繋がる内容である。

到達目標は、ピアノ演奏に関する知識と専門的スキルを身につけ、思考しながら豊かで多様な表現力を伴った演奏ができるようになることである。

2. 概要について

本授業は、演習を中心とした形態で行う。2名の教員がクラス分けで担当しており、本授業を受講した音楽文化コース3回生の11名中、福富クラスの受講者は6名であった。「ピアノ④」を受講した11名全員が「ピアノ①」～「ピアノ③」を段階的に受講し、続く「ピアノ⑤」まで修得している。

各受講者の経験や熟達度に差があることから、取り上げる対象楽曲については、これまでの実施課題及び熟達度に応じて、面談の上決定した。

授業では、各受講者が10分程度のロマン派作品を取り上げて演奏研究を行った。最終試験において、演奏会形式による全体での発表を行った。

3. 授業時に心がけた点

1) 演奏時の身体の使い方と表現力向上について

演奏時には、楽譜に示された情報を正しく理解して表現することの他に、技術面の向上のため、身体の有機的な作用を大切に心がけた。具体的には、初心者から熟達者までの多様な受講生に対し

て、座位の基本姿勢の確認、体幹と腕構造の分化や指先までの連動を意識すること、各指の独立と打鍵に関わる練習法など多岐に渡る。

また、楽曲の特徴や曲想等からイメージした表現を導き出す“音色づくり”に関して、すでに専門的知識やスキルを有している熟達者に対しては、精緻な打鍵コントロールによって要求する音や和音を作り出すためのスキルを養うことも目的のひとつとして実践した。授業時、学習者が演奏しづらいと感じている箇所をピックアップし、その要因を明らかにする作業を行うとともに、それらの改善を図る練習法の実践を毎時の課題とした。

さらに、学習者自身がイメージして思考する過程を大切に考え、楽曲構造や表現に関する問いかけを行うとともに、表現内容（アゴーギク、デュナーミク、フレーズング等）を楽譜に記す作業を取り入れるなど、それら一連の行程により、自らの表現内容と方法を確認し、演奏の質的向上と授業外学習のモチベーションへと結びつくことを意図した授業展開を心がけた。

2) 地域社会を核とした教育と研究のつながり

毎年、ピアノを受講する学部生と大学院生を対象に学外での演奏発表会を開催しており、今年度（2017年度）は12月に松山市内の演奏会場にて安積教員クラスと合同で開催した。

本演奏会は、学生が地域に音楽を発信し、運営にも主体的に関わることによって、音楽を通じた地域とのかかわりを体験することを意図している。また、授業で取り上げた対象楽曲の演奏発表や異学年との交流を通じて、自己課題の明確化による技能・表現の向上も目的とした。

4. 授業アンケート

本アンケートは、「ピアノ④」「ピアノ⑤」を履修した福富クラスの受講者6名を対象に実施した。

1) アンケート結果(選択式)

1. 本授業に興味を持つことができましたか

そう思う	6名 (100%)
どちらかといえばそう思う	0名
どちらかといえばそう思わない	0名
そう思わない	0名

2. 本授業で用いた教材についてどう思いますか

適切であった	6名 (100%)
どちらかといえば適切であった	0名
どちらかといえば適切でなかった	0名
適切でなかった	0名

3. 本授業の進度についてどう思いますか

適切であった	6名 (100%)
どちらかといえば適切であった	0名
どちらかといえば適切でなかった	0名
適切でなかった	0名

4. 本授業の難易度についてどう思いますか

適切であった	6名 (100%)
どちらかといえば適切であった	0名
どちらかといえば適切でなかった	0名
適切でなかった	0名

5. 授業時間外学習の取組はどうでしたか

充分であった	4名 (66%)
どちらかといえば充分であった	1名
どちらかといえば充分でなかった	1名
充分でなかった	0名

6. 受講後、新しい知識や技能を得ることはできたと思いますか

そう思う	6名 (100%)
どちらかといえばそう思う	0名
どちらかといえばそう思わない	0名
そう思わない	0名

7. 受講後、到達目標は達成できたと思いますか

そう思う	3名 (50%)
どちらかといえばそう思う	3名 (50%)
どちらかといえばそう思わない	0名
そう思わない	0名

8. 授業外での学習時間について

30分～1時間未満	1名
2～3時間未満	2名
5～6時間未満	2名
8～9時間未満	1名

2) アンケート結果(記述式含む)のまとめ

受講者全員が授業の進度、使用教材、難易度について「適切であった」と回答、また、受講後に新しい知識や技能を得ることができたと回答した。授業時間外学習については、「充分であった」が4名、「どちらかといえば充分であった」が1名、「どちらかといえば充分でなかった」が1名であった。

「本授業と地域社会との関わり」についての記述式アンケートでは、「演奏会等で演奏をすることで地域社会へ音楽文化の素晴らしさを伝えることができる」「演奏会を通じて音楽の素晴らしさを共有し合うこと」「身につけた技術・表現が他の場で役立つ」等、地域での演奏発表の機会は、学生の専門的な学びが地域文化の発展に資するものとの意見があがった。

5. まとめ

授業実践における地域社会をフィールドとした教育・研究のありよう、また、それらが相互に作用する仕組みづくりの難しさを感じた。実技演習を主とする本授業では、授業内で全受講者の課題を振り返るための時間が十分に確保できないため、授業外の時間を活用して個別に対応を行っている現状がある。年1回の演奏発表会の取組は、学習者の動機付けに繋がり、演奏技能の向上にも寄与しているものと推察できる一方、授業外でも各自が主体的に行える取組を増やすことの重要性を再確認した。受講者間のディスカッションをさらに深めるなど、実技演習以外でも高い意識付けと自発的な授業参加へ繋がるような工夫が求められる。